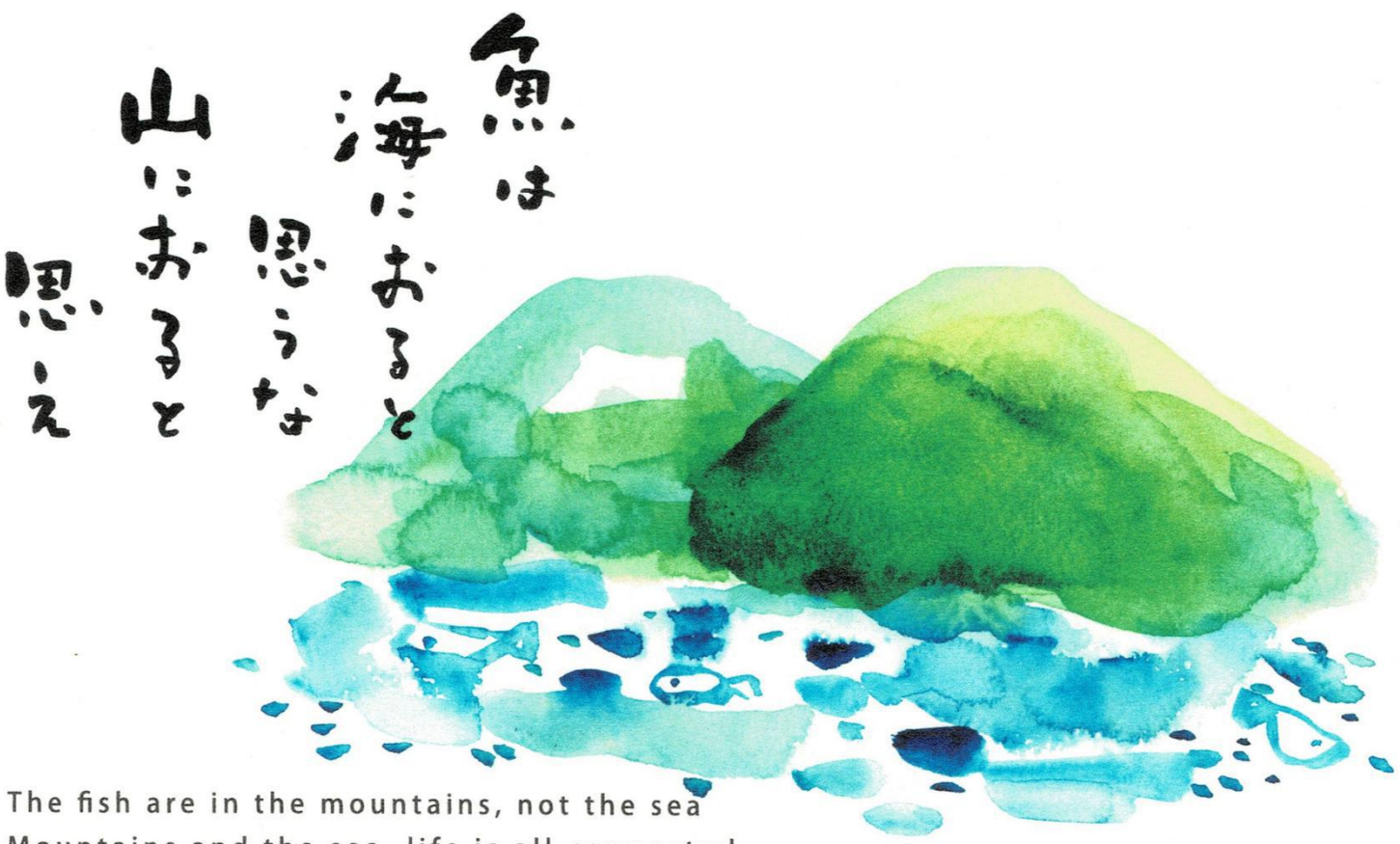
news
長良川市民学習会ニュース



The fish are in the mountains, not the sea
Mountains and the sea, life is all connected
illustration : Katsumi Yada

「魚は海におると思うな、
山におると思え」
父が祖父から受け継いだ
教えのひとつだ。
はじめてこの教えにふれた
とき、私には真意がさっぱ
りわからなかった。
やがて知った。
山と海といのち、すべては
つながっていることを。

いのちをつなぐ海のものがたり
- 未来に続く、いのちの循環 -
―『すべてはつながっている』より

post card

©Katsumi Yada

No.40

2024 年 6 月 5 日

情勢と活動報告　武藤仁 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
伊勢湾から長良川を見直しました　粕谷志郎・・・・・・・・・・・・・・・・・3
よみがえれ！長良川シンポジウム「海と川」レポート　三石朱美・・・・5
ニジマス流出問題について　堀敏弘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
「長良川のアユと河口堰」の出版　武藤仁・・・・・・・・・・・・・・・・・12
「長良川のアユと河口堰」を読んで　川那部浩哉・・・・・・・・・・・・・13
偲ぶ　高橋恒美さん、嶋津暉之さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
事務局より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
よみがえれ長良川参加団体紹介 17　中部の環境を考える会　・・・・・　18
パネル展「よみがえれ長良川 2024」開催のおしらせ ・・・・・・・・・・19

情勢と活動報告

長良川市民学習会 事務局長　武藤 仁

前号 39 号発行 10 月 10 日以降、長良川の状況と長良川市民学習会の活動報告をします。

昨年来、長良川において最も大きな話題となっているのがアユなどの生態系を脅かす特定外来種コクチバスの侵入問題です。関係者は事態を深刻に受け止め、岐阜県は「完全駆除」めざし財政的手立てをしながら対策を立てています。

「ニジマス流出」事件

そんな最中、２月１日、鵜飼観覧船乗り場あたりで､巨大な釣り堀がオープン｡多くの市民が、何で？と首をかしげました。「清流長良川の鮎」のイメージダウン！鮎は大丈夫なの？

漁協が開設して釣り具業者が委託を受けて運営するものですが、岐阜県も岐阜市も「後押し」しました。そして３週間後、「外来種ニジマスが流出」という市民が心配したとおりになってしまいました。

オープン・セレモニーに参加し、祝う岐阜市長と県知事
（東海テレビ映像）

この問題については「ニジマス問題について」（本紙ｐ９）で詳しく述べます。参照ください。

2024.3.23

長良川にバス

外来種へ危機感高めよ

「清流のアユ」が世界農業遺産に認定されている長良川で、北米原産の特定外来生物、コクチバスが相次ぎ見つかった。肉食で繁殖能力が高く、アユなどの生態系を脅かす恐れが高い。岐阜県は、国内の成功例がないとされる河川での「完全駆除」に乗り出した。

＝写真、岐阜県提供＝

コクチバスは、類似のオオクチバスと並びブラックバスの通称で知られる。大正期に釣りや食用として国内に持ち込まれた。低水温や急流にも強く、天竜川（長野県）や那珂川（栃木県）などでアユへの食害が確認されている。

岐阜県内では、伊自良湖（山県市）で20年ほど前に初めて見つかったが、その際は水抜きをして駆除に成功。しかし、ここ数年、揖斐川や木曽川で見つかり、長良川でも昨年5月、美濃市内で初めて確認された。岐阜や郡上市でも報告が続くなど、アユ漁や鵜飼いへの影響が危惧されている。

本来そこにいなかった外来種が「人の手」で持ち込まれ、生態系のバランスが崩れる例は少なくない。例えばアメリカザリガニやアカミミガメにより日本固有のザリガニやイシガメは駆逐された。

コクチバスなどの特定外来生物は輸入や販売、野外への放流が禁じられ、違反者には懲役刑や多額の罰金が科せられる。いったん自然界に繁殖を許してしまうと完全駆除するのは至難の業だ。

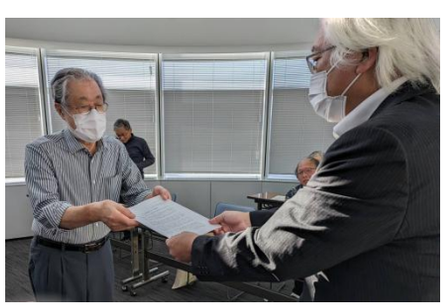
岐阜県は昨年末、漁協や自治体とも連携し、網漁や水中に電流を流して気絶させ駆除したり、釣り客から1キロ2千円で買い取ったりと、大がかりな対策を決めた。来月から年1億円を投じて2025年度中の完全駆除を目指し、さらに木曽川や揖斐川にも対象の範囲を広げるという。財政面や費用対効果を勘案し、抜本対策がとれていない他地域にも参考となろう。

外来種による駆逐など生物多様性の損失を食い止め、人の行動で回復させることを「ネイチャーポジティブ（自然再興）」と呼ぶ。国際会議で採択され、国内にも広がりつつある。生物多様性損失への危機感を共有する機会にもしたい。ただ、生き物である以上、繁殖しようとするのは自然の摂理である。外来種の問題は、人のエゴや経済活動の結果だということも忘れたくはない。

2024. 3. 23 中日新聞「社説」

私たち「よみがえれ長良川実行委員会」は、昨年の「岐阜市版レッドリストから鮎の削除」にみられる岐阜市の自然環境保全施策の後退に、抗議し続けてきました。この釣り堀問題についても「長良川の環境を守る要請」の第１項目に掲げ５月 14 日に行動を行いました。

市側とやり取りして驚いたのは、環境保全課がこの「釣り堀」設置を全く知らされていなかったとのことでした。岐阜市政においては長良川は「観光」「水産」の経済資源であって「魚類」や「環境」の保全の視点がまったくない実態に暗然としました。



2024. 5. 14 奥田泰史環境保全課長に
要請書を渡す粕谷志郎共同代表

愛知県民講座「長良川河口堰の最適運用について～韓国・洛東江の先進事例から学ぶ～」

３月９日（土）愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会主催の県民講座がウインクあいちで開催されました。韓国ナクトンガン河口堰の３年の試験開門を経て 2022 年２月常時開門した経緯と現況報告がナクトンガン環境ＮＧＯ、元釜山市職員、k-water（韓国水公社）職員からあり、つづいて、この３人が愛知県の検討委員の質問に答える形での討論がありました。開門に至る現場の本音の議論が聞けて大変興味深いものでした。この様子は当会ホームページで動画でご覧になれます。

右の写真は、シンポジウムのあと大村知事と韓国のみなさんと愛知県の検討委員の面談の際の撮られたものです（FB「大村ひでのり」公式サイトより）。左から２番前が元釜山市職員パクさん、３番目がＮＧＯのチェさん、４番目が K-Water 職員のイさんです。パクさんとチェさんは、当会ホームページ TOPICS【2016/10/8-11】ナクトンガン河口堰視察と交流の旅でも登場しています。

3/31 シンポジウム「海と川」と愛知県水産試験場の視察

伊勢湾の最近の深刻な漁業不振が聞こえ伝わる中で、3 月 31 日にシンポジウム「海と川」を開催しました。鳥羽市立「海の博物館」平賀大蔵館長の記念講演、新美貴資（フリーライター）さんと平工顕太郎（長良川漁師）さんの報告のあと会場満員の 100 人を超える参加者の中からの質問で、議論を深めました。その様子は、司会を務めていただいた三石さんが「よみがえれ！長良川　シンポジウム「海と川」レポート」（本紙ｐ５）で報告してくれました。

また、海を見、現場の話を聞こうと粕谷、亀井両共同代表をはじめ８名で知多半島の先端にある愛知県水産試験場漁業生産研究所を５月９日に視察しました。レクチャーしていただいた中村元彦主任の黒潮の地球規模からのお話などにとても驚きました。その後、豊浜漁港を訪れ山本昌弘組合長にもお話を聞きました。「長良川河口堰に関する要請書」を知事に提出された愛知県漁連の一員でもあり、ざっくばらんな話が聞けました。粕谷代表の「伊勢湾から長良川を見直しました」（本紙Ｐ３）をご覧ください。

徳山ダム導水路事業費 2.5 倍増の発表に沈黙の各自治体

３月 28 日木曽川水系連絡導水路事業の検討の場第８回幹事会が開催されました。ここでは、事業費 2.5 倍の増額と工期の大幅延長が突然提案されました。「突然」とは言っても、市民にとってだけで自治体にはすでに周知されていたのでしょう（岐阜県では、この会議直前に各県議にこの内容の概略を通知）。「反対」や「疑問」を表明する自治体が皆無という異常な会議でした。

緊急の呼びかけに応え「検討の場」会場前で抗議行動する市民（5 月 17 日）

名古屋市に至っては、建設費負担増額案を丸呑みし、加えて、市独自の「新提案」に基づく、50 億円上乗せまでして、令和 73 年度まで続く市民負担計画を厚顔にも市会経済水道委員会において報告しました。

検証のとりまとめを急ぐ国・事業者は、５月 17 日第２回「検討の場」を開催。本省へ上げる「検討報告書」の（素案）を提案し、形ばかりの地方の意見を聴くフローを確認しました。

私たちは、市民を無視したこの国・事業者の進め方と、各自治体の「腰抜け」に怒り、緊急に「検討の場」会場前で抗議行動を展開しました。この日の夜のＣＢＣテレビは、反対する市民団体が「水道料金が上がるぞ！」と声を上げたと私たちの行動を報道しました。

伊勢湾から長良川を見直しました

長良川市民学習会代表　粕谷志郎

5 月 9 日、快晴の下、知多半島へ向かい、愛知県水産試験場の中村元彦さん、豊浜漁協の山本昌弘さんから話を聞き、勉強しました。私なりに、これをまとめてみました。改めて川と海の深いつながりに絶句しました。

海産物漁獲量に影響を与える要素

近年、伊勢、三河湾での漁獲量が減少していることはよく言われています。原因は多々あり、魚種によっては増えているものも有ります。中村さんの話で、原因と影響海産物の関係が明快に理解出来ました。

愛知県水産試験場漁業生産研究所にて
（右から４番目の方が中村元彦さん）

1. 干潟の埋め立てによる影響

   1970 年ころから連続的に、かつ最近はほとんど漁獲を失った：ハマグリ、ガザミ（ワタリガニ科）東三河のアサリ、東三河のノリなど。

   干潟、藻場は貝類の生息域、稚魚の生育場として重要、これがどんどん埋め立てられた。

2. 河川の窒素負荷量減少による影響

   1980 年頃をピークに減少傾向：マイワシ、スルメイカ、スズキ、クルマエビ、シャコ、カレイ類、東三河のノリなど。

   1980 年頃は河川から流入する窒素、リンがピークとなっており、富栄養化により赤潮が発生していた。しかし、皮肉にもその頃が漁獲量は最も多かった。その後、流入は減少し続け、漁獲も減り続けた。

3. 貧酸素水塊の影響

   1980 年頃より減少傾向：アカガイ、ナマコ、シャコ、トリガイなど。

   貧酸素水塊の拡大域と生息域が一致した底生動物。

4. 透明度上昇の影響

   減少した魚介類：カタクチイワシシラス、カレイ類、シャコ、サルエビ、アカエビ、コノシロ、イカナゴなど。

   増加した魚類：マダイ、ブリ、サワラなど。

   1980 年頃を底に透明度が上昇している。透明度の上昇はプランクトンの減少によるもので、これを餌とするプランクトン食の魚介類は減少した。プランクトンの減少は栄養塩類の流入の減少による。増加した魚類は外洋からの流入による。

貧酸素水塊の謎

貧酸素水塊は河川から流入する栄養塩類により、プランクトンが異常発生する赤潮によるものと考えられていました。ところが、近年栄養塩類の流入が大きく減少しているにもかかわらず、貧酸素水塊は拡大傾向にあります。これは、鈴木輝明名城大学院特任教授によると、干潟や浅場が浚渫や埋め立てで大きく失われ

たことが主因であることを見誤ったからだと指摘します。こうした干潟や浅場では二枚貝が生息し、プランクトンを食べて水を浄化する能力があるにもかかわらず、埋め立てで失われ、貧酸素水塊を発生させたのだということです。また、湾内では河川水の流入で表層は湾の奥から湾外に向けた流れが、底層水は逆に湾外から湾内に流入する循環が発生します。底層水は栄養分が豊富でプランクトンの成育を支えます。さらに、河口堰やダムなどは海域に流入する河川水量を減少させ、この循環を妨げる可能性も指摘しています。

外洋の影響

海は平らではなく、水面が高い所や低い所が、まるで、天気の気圧配置の様に等高線で描くことができます。高い箇所は温度が高く密度が低い、低い箇所は温度が低く密度が高い海域となります。前者は栄養分が少なく、澄んでいます。黒潮がこれにあたります。温度の低いところは養分が多い所です。黒潮の通り道トカラ海峡（九州と沖縄の間）では1mもの高低差があるといわれます。1980年ころより日本周辺の海面は上昇し続け、近年は過去最高となっています。地球温暖化の影響と考えられます。これに伴い、伊勢湾奥を除く、伊勢湾、三河湾の透明度が上昇傾向にあります。この影響は前述の4．のように、カタクチイワシ、カレイ、シャコなどの減少と黒潮に乗り北上するマダイ、ブリなどが相対的に被捕食生物の多い伊勢湾、三河湾へ入り込んでくる現象が起こります。

貧栄養化の影響

海の食物網で最も下層に位置する一次生産者は植物プランクトンです。リン、窒素、二酸化炭素などの無機物を利用し、光合成によって有機物を生産します。これを低次捕食者である動物プランクトン、小魚、エビなどが捕食し、さらなる高次捕食者となる大型魚の餌になります。1980年あたりから、伊勢湾、三河湾のリン、窒素は一貫して減少し続けています。それに伴い植物プランクトン（クロロフィルa、フェオ色素値で測定）も減少し続けています。これは富栄養化（赤潮）対策で、1980年から、化学的酸素要求量(COD:有機物の量)とともに総窒素､総リンの水質総量規制が実施され､陸域からの供給が大幅に削減されたからです。このことが、伊勢湾、三河湾の生物生産のピラミッドの最下層を著しく狭めました。当然、高次の生物も含め、狭いピラミッドになってしまいました。

豊浜漁協の山本昌弘さんは言います､｢サイホンで長良川河口堰に貯まった下層水を流せばよい。｣と。やはり、堰の運用はこの問題に何らかの影響を与えそうです。しかし、スイッチを押すだけで河口堰は全開できます。愛知県は下水処理水の基準すれすれまでリン、窒素の量を上げて放流する実験を始めたそうです。豊川、矢作川で放流され、真っ先にノリの色落ちが少なくなり、アサリも増えたとのことです。

豊浜漁港の競り（せり）のようす
2024/5/9

おわりに

私達は勘違いをしていたのかも知れません。1980年頃の赤潮が多発した伊勢湾は最も生物生産が多かった時代でした。長良川では富栄養化により藻類が大発生を繰り返していました。富栄養化絶対悪の考えが私達を支配していました。化学物質などの放出には厳しい規制が必要ですが、有機物の供給は見直しが必要な時代に入ってきたのかもしれません。

よみがえれ！長良川 シンポジウム「海と川」 レポート

日本環境法律家連盟 事務局　三石朱美

2024年3月31日、岐阜市内のメディアコスモスにて、よみがえれ！長良川実行委員会によるシンポジウム「海と川」が開催されました。晴天の日曜午後にも関わらず、会場に足を運んでくれた参加者は100名を超え非常に盛況な会となりました。

特に事前の新聞報道などのおかげもあってか、参加者の多くに、これまでに見かけたことがない方のお顔が多くみられたことは着目すべき成果かと思われ、同時に、岐阜・東海地域の人々の長良川を中心とする川のある生活への関心の高さを改めて感じられたとても有意義な機会となったと思います。

シンポジウムでは、基調講演に三重県鳥羽市の「海の博物館」館長・平賀大蔵さんより『今の伊勢湾～伊勢湾の環境悪化の推移と今日の問題』と題するお話をいただき、つづいて、フリーライターの新美貴資さんから伊勢湾の水産業についてのご報告と、長良川漁師の平工顕太郎さんから長良川への思いと題するご報告をいただきました。

後半のディスカッション部分では、岐阜の町づくり・地域づくりの歴史には長良川が欠かせない存在であることをNHK番組ブラタモリの中でもしっかりと伝えられ、番組案内役もつとめられた富樫幸一岐阜大名誉教授のコーディネートによって、充実したやりとりを伺うことができました。

特に、この３名の講師によるご講演については長良川市民学習会のHPからYouTubeにも公開されています。いずれのお話も非常にわかりやすく、時間があっという間に過ぎていくほどの充実度なので、ぜひ、多くの人にご視聴いただけたら嬉しく思います。https://www.youtube.com/watch?v=uSFE9AbYZ6k

「海の博物館」館長・平賀大蔵さん

さて、基調講演の平賀さんのお話では、海側からみると伊勢湾の入り口にあたる鳥羽という地点から、現在、伊勢湾がどのような状況にあるのかについてお話をいただきました。平賀さんが館長を務めておられる海の博物館は、鳥羽や伊勢志摩地域の海女漁をはじめとする伝統的な漁具や船など、多くの道具や資料が6万点にもわたり収集、展示されているそうです。漁法の近代化、海洋環境の変化などによって現在ではもはや手に入りにくい資料も多く有している博物館だそうです。筆者自身は、まだ訪問したことがないので、お話を伺いながら、ぜひ一度は訪問してみなくては、とかたい決意をしました。

かつて大変豊かな漁場であった伊勢湾では、春夏秋冬、季節ごとに多くの種類の魚介類が獲られていました。かつては非常に多く食されていたタコやボラが最近はとても少なくなっていること、コウナゴやアナゴは獲れなくなってきたことなど、食卓にのぼった多くの魚についてお話しいただきました。

悲しい告発だけでなく、例えば、出世魚でもあるボラについて、その呼び名の変化をご紹介いただくことで、お話を聞きながら、かつて、その魚をそう呼んだ地域の人々の豊かで楽しい感性をも共有できたような

気持になりました。

かつて伊勢湾は日本で最も豊かな海と呼ばれていたそうです。外洋だけでなく、湾の海底や浅い場所に生活する魚やナマコのような底生生物、海から川に上っていく鮎のように、いろいろな生活をする多くの魚介が生きていました。漁業で使う道具のお話しからは、それぞれの魚の生活に応じた漁法、漁具のお話しもあり、漁業が生活の一部であって、人々の生活基盤でもあった風景を想像しながらお話を伺うことができました。

しかし昭和30年代、40年代の高度経済成長期になると、陸地にあった葦原が埋め立てられ、上流からは生活用水・工業用水の排水が多くみられるようになります。それによって貧酸素水塊という現象が生じ、また、赤潮が発生するようにもなりました。汚れた海水にとても弱いタコやカニが取れなくなっていきました。

海底の地形からもわかるヘドロの堆積量、水の流れを図示しながら、個々の魚がどのような環境に弱いのかといったそれぞれの性格とあわせてお話しいただき、海の環境変化がいかに海の中の生態系に影響を与えているのか、ご紹介いただきました。

また、川の水は海の水より軽いこと、夏と冬では流域に降る雨の影響によって海の中の塩分濃度が変わってくるといったお話は、分水嶺から伊勢湾にまたがる木曽三川の環境全体が、伊勢湾の海の中に影響をもたらすことが非常にわかりやすく、多くのボランティアの人が参加する答志島の奈佐の浜プロジェクトのご紹介など、水質や気温のみならず、あらゆる人間生活の行為が伊勢湾の環境に影響を与えていることが、改めてわかりました。

現在、伊勢湾の水質はきれいになっているそうですが、その一方で貧酸素水塊の長期化による栄養不足は続いており、海の生き物たちの食物連鎖に大きな影響が出ています。植物プランクトンを食べる魚に栄養不足が見られ、その小魚を食べる魚たちの数も減っています。絶滅した魚も多くなり、また、コウナゴなどは漁獲量の減少だけでなく、栄養失調状態のものが多くみられているそうです。

鳥羽では海女漁も有名ですが、海女さんの数が減っているだけでなく、現在は、アワビそのものの漁獲量も激減しており、観光業にも大きな影響が出始めています。

平賀さんのお話は、海と川、山はつながっているということのみならず、山や川をつうじ、つまり上流・中流・下流の人間生活の影響をうけて海に流れ込む水の変化が、伊勢湾の中に大きな影響をもたらしていることを、その具体的な例を通じて告発される厳しいものでもありました。

お話を聞いているととても悲しくなってきましたが、会場全体に、そのメッセージがしっかりと伝わったように感じました。

フリーライターの新美貴資さん

つづいて、フリーライターの新美さんから、新美さんが撮影された写真を中心に、伊勢湾周辺地域で漁業に携わる人々についてご紹介いただきました。平賀館長からいただいたお話の深刻さから、もう、生態系の回復は間に合わないんじゃないかととても悲観的な気持ちにもなったのですが、新美さんがご紹介くださった写真には、各地域で漁業を営む人々の漁の風景や魚を売り買いする風景など、人々が生き生きと生活されている様子がありました。

伊勢湾という場所がら工業地帯がとても近くに位置している中でも、沿岸部の桑名のハマグリ漁の風景や四日市コンビナート近くの漁業風景や、セントレアすぐ横での海苔漁の風景など、非常に印象的なものが多くありました。漁業に携わる人々の表情やたたずまいがとても伝わる写真ばかりで、実際に自分が訪問したとしても自分ではこのようなコミュニケーションはとれないようなエピソードや風景をいくつもご紹介くださり、時間が短くてもったいなかったのです

長良川漁師 平工顕太郎さん

が、今もなお、地域の中に続いている豊かな魚食文化や伝統風景をご紹介いただきました。

そし今回のシンポジウム開催地でもある岐阜市内で、漁業を営んでおられる平工さんから、長良川の恵みとともにある生活についてお話をいただきました。聴衆の多くになじみのある岐阜市内・長良川からの風景や動画とともにご報告いただき、少し生活圏から離れた場所でもあった平賀館長や新美さんのお話しが、身近な自分自身の生活とつながっていることをとても想像しやすいご報告だったように感じました。

また、長良川漁協がどのようにアマゴやサツキマスの漁獲量調整をしているのか、また、アユについてのお話では、漁協がそれぞれの漁法について、どのように漁業者全体としてそれぞれの方法を維持しながら漁獲量を決めているのかといったお話しや、アユの顔つきからわかる個々の鮎の生き方など、現場の人だからこそ語れるお話しがあって、とても面白いものでした。

魚をとって生活する平工さんだからこそ、命を食べきるためにおいしく食すために行っている絞め方や内臓を活用した「うるか」作りのご紹介もありました。

命の連鎖を断ち切らないために何ができるか。平工さんは、自分だけでなく、子どもたち、地域の人々、平工さんがかかわる人々とともに体験し考える場として、遠くない将来、自然学校を作りたいという夢を私たちにも共有くださいました。

休憩をはさんだディスカッションは、会場からも非常に多くの質問をいただき、そのほとんどに触れられなかったのが少し残念ではありましたが、前半の充実したお話をひきついで、コーディネーターの富樫さんを含む４名で、伊勢湾流域の伝統漁具のお話しや生き物のお話し、また、水質調査のお話しなど、多くの話題が深まった充実したものとなりました。

会場からは、シンポ開催の約２か月ほど前、大雨によって、長良川に造られたニジマスの釣り堀から 3000 匹のニジマスが逃げた出来事についての懸念があげられ、岐阜市は影響がないとしているが実際のところ、あるともないとも言い切れない、わからないというのが本当のところだ、といった指摘もありました。

川と海のつながりがはっきりと伝わるシンポジウムとなったからこそ、開門されないまま上流と下流のつながりが区切られた状態となっている長良川河口堰の課題や、また、揖斐川の水を木曽川に流すという形で、上流の生態系や水質が攪乱されるのではないかとの心配がある木曽川導水路問題など、生態系の回復にとって人間ができる喫緊の課題について、もっとたくさん触れたかったという思いはありますが、会場の人々に、主催者の危機感が共有できたことは大きな成果になったと思いました。

まったく個人的なことで恐縮ですが、昨年秋、海外から来た友人に飛騨・木曽地方の山々から街の間をキラキラ流れる長良川や木曽三川、伊勢湾と遠景にある鈴鹿の山々の風景を見せたく、案内がてら金華山に登り、帰り道で足を骨折して、結構な大けがをしてしまいました。

骨折のドタバタはありましたが、岐阜城天守閣からみた濃尾平野や伊勢湾の風景は、とても雄大で、川と海とのつながり、山々の恵み、そしてこの風土に生きる人々の豊かな生活を想起させるに十分なものでもありました。遠く海外から来た友人に、まず自分が生活している場所の風景を紹介したいと思った際、最初におもいついたのが、金華山から見る景色であり、川を指しつつ「よみがえれ！長良川」の仲間たちとこの風景と風土をこれ以上壊さないようにと活動しているんだよ、と伝えることでした。

2022年末に採択された生物多様性条約・昆明モントリオール枠組（ＧＢＦ）では、2030年までに生態系を回復するための取り組みをなすことが最重要課題とされています。

引き続き、皆さんとともに、健康な伊勢湾・長良川を取り戻す取り組みに関わっていきたいと思います。

シンポジウム参加者のアンケートから（回収33枚）

１．平賀大蔵さんの話はどうでしたか。

・木曽川の栄養が三重の海産物を育てているという話がよかったです。

・２度ほど海の博物館を見学させていただいたことがあります。幅広く勉強されているだけでなく、三重県全域を視野に活動されているのには、驚きました。

・伊勢湾・三河湾の豊かさが急激に失われていることと、貧栄養との関係や生物多様性が森や川の上流と同時に起きていると思う。

・こうなご　たこ　あなご等　大好な魚貝類がとれなくなっているのは本当に残念なことです。兵庫県の方でも、いかなごがとれなくなり「くぎ煮」が出来ないようである。海に囲まれながら魚が苦しまずに住める様にしなければならない。

・木曽三川から流入する栄養塩が、伊勢湾西側を流れる様に偏りがあることを知り、勉強になりました。

２．新美貴資さんの話はどうでしたか。

・伊勢湾でも地区ごとにとれる海産物のさかいがよくわかった。

・今でも残っている漁港では、生きものをいなくなるまでとってしまわないように守るとりくみを続けているのが偉いと思いました。

・珍しい写真に釘付けになった。心に残った言葉が胸にささった。

・「多様であることが豊かなこと」すべてにつながると思いました。

・背景を想像すること　だいじだ！　最後に話されたこと、よかったです。私もそんな暮らしに近づけたいと思いました。

・最後の「上流の人は下流のことを、海のことをもっと知るべき」「下流の人は上流のことを考えてる」が印象に残りました。

・桑名、四日市の漁師さんは殆どいないと思っていましたが、努力されて今があると知れたので今後応援したいです。

３．平工顕太郎さんの話はどうでしたか。

・もうからない事がもしかしたら一番大切なことなのかと…。うすうす感じてはいましたが。

・昔ながらの漁法が続けていらっしゃることがすごいことだと思いました。自然と共存のとりくみをしっかりききたいと思いました。応援したいです。

・アユ漁師の仕事に限らず、暮らしが自然と一体となっていてすばらしい。

・若手でよく踏み切ったと感心した。業務では伝統しきたりがきつい事と思います。耐えて頑張ってください。

・驚きの川漁師、長良川の豊かな文化です。川漁も多様なのですね。庭でアユと蛍、素晴らしい暮らしですね。自分も近づけていきます。

・長良川は、まだまだ生きているなと感じました。川底のコケが、除草剤の影響を受けないか心配です。

本日のシンポジウムは全体としてどうでしたか。

良かった：30　　まあまあ：2　あまり良くなかった：0　　無記載：１

ニジマス流出問題について

長良川のへぼ釣り師　　堀　敏弘

長良川市民学習会ニュースの読者のみなさんの多くの方はご存知だと思いますが、岐阜市湊町の長良川鵜飼観覧船乗り場に2月1日から3月末までの期間限定でオープンした管理釣り場「アングラーズフィッシングパーク NAGARA」から2月19日午後、大雨による川の増水で釣り堀の網が破れたほか、釣り場を囲う土砂も崩れ、ニジマス約3,000匹が長良川に流出しました。

「長良川に外来魚流出！」との見出しで新聞、テレビでの報道やソーシャルメディアなどで取り上げられ全国的に大きな話題となりました。

この問題の影響の大きさに、釣り堀を開設した長良川漁業協同組合は、営業再開を断念し残った魚を回収しました。

岐阜県議でもある玉田和浩長良川漁協組合長は、「世界農業遺産の清流長良川の鮎を守るため、川に注目してもらおうと始めたことが、あだになった。鮎に影響はないが、外来種というと一緒に捉えられてしまい、誤解を招くのでやめた。反省すべきは反省したい」と述べ、来年以降の運営も「やめる」と明言しました、とあります。

2024年(令和6年)3月8日(金曜日)

増水 ニジマス3000匹流出

岐阜県議玉田氏外来種

2月開設 長良川の管理釣り場

防止策見通せず今季営業中止

岐阜市湊町の長良川鵜飼観覧船乗り場に2月にオープンした管理釣り場で、川の増水で魚を囲う網が壊れるなどして、外来種のニジマス3千匹が長良川に流出した。釣り場は鵜飼のないオフシーズンの観光誘致のため長良川漁業協同組合（同市）が開設、漁協は十分な流出防止策が講じないとして、予定していた3月末までの今季の営業を中止、来季以降の運営も取りやめる方針だ。（井上京佳）

釣り場は長良橋近くにあるアングラーズフィッシングパークNAGARA」（鵜飼観覧船乗り場の川岸から網を張って約3千平方㍍の釣り場を整備。2月1日にオープンし、養殖したニジマスを放流。漁協の委託を受けた同市の釣具メーカー「ジークラック」が運営していた。

ニジマスが流出したのは2月19日午後。岐阜地方気象台によると、前線を伴う低気圧の影響で、長良川流域では二つの時期には珍しい大雨が降った。上流部の雪解けも影響し、近くの長良川岸から網を張って約3千平方㍍の釣り場を整備。2月1日にオープンし、養殖したニジマスを放流。漁協の委託を受けた同市の釣具メーカー「ジークラック」が運営していた。

ニジマスが流出したのは2月19日午後。岐阜地方気象台によると、前線を伴う低気圧の影響で、長良川流域では二つの時期には珍しい大雨が降った。上流部の雪解けも影響し、近くの長良川水位観測所では朝から夜に平方㍍の釣り場を整備。2月1日にオープンし、養殖したニジマスを放流。漁協によると、水位は網の高さを超え、網の一部が破れたほか、釣り場を囲む土砂も崩れた。釣り場にいた約640匹のうち約3千匹が流出し、同日から営業を停止した。

ニジマスは、塩焼きやすしのネタとして人気の魚。ただ、北米原産で他の魚などを食べるため、遺伝子管理が必要とされる国の「産業管理外来種」に指定されている。岡田指導課の担当者は流出について「アユ漁や長良川の生態系に深刻な影響はない」と説明。ニジマスは県内の河川で100年以上前から釣り用に放流されて来たが、これまで定着や繁殖の例がなく、現在も長良川流域の複数の漁協で放流されている。

長良川や流域のため池などは昨年、北米原産で強い魚食性の特定外来生物「コクチバス」が見つかり、特産のアユを守るため県や漁協関係者らが、特殊な電気ショッカー船を使ったコクチバスの駆除に乗り出して、ニジマスもアユを捕食する恐れがあるが、里川振興課の担当者は「コクチバスなどに比べて捕食量は雲泥の差」と指摘。一方で「外来魚の流出」によるブランドのイメージダウンは心配」と話した。

大雨による魚の流出を巡り、釣り場の占有許可を出した国土交通省木曽川上流河川事務所が問題視、漁協に経過報告と再発防止策を求め行政指導をした。

長良川漁協は再発防止策が見通せないとして、今季の釣り場の営業停止を判断。3月4日までに釣り場に残ったニジマス約3千匹や網などを全て撤去した。

2月1日のオープンから19日までに700人の釣り客が訪れた。漁協の担当者は「釣りに親しんでもらうためのもので、反響が多かっただけに残念。お騒がせして申し訳ない」と無念さをにじませた。

3月8日中日新聞岐阜・近郊版

一方、岐阜県の里川振興課は今回の流出について「ニジマスは、昨年長良川で見つかったコクチバスと比べて魚の捕食量は少なく、アユ漁や長良川の生態系に深刻な影響はない」と結論づけています。

また岐阜県の古田知事は、県議会でこの件の質問に答え、「長良川ブランドのイメージダウンが危惧される」として原因を検証する考えを明らかにし、施設の管理運営が問題であり、釣り場の場所や危機管理体制などが適切だったか検証、他の管理釣り場への指導、管理を徹底すると述べ終了となりそうです。今後どのような検証がされるのか注視していく必要があります。

しかしこの問題、これで終えて良いのでしょうか？私がこの管理釣り場の開設を知ったのは1月13日に岐阜新聞のWEBニュースを見たからでした。

長良川鵜飼のオフシーズンに釣り堀を開設して観光客を呼び込むことや、長良川の認知度を高める狙い、という目的は理解できます。しかしその釣りの対象魚が、ニジマスとあったのでビックリしてしまいました。すぐ現場を見に行きました。その日は重機が入って釣り堀の囲いとなる土砂を積み上げている真最中でした。しかし土砂は水面から1メートル程までの高さで心配になり、1月17日に私が担当している長良川河口堰建設に反対する会・岐阜のブログ「長良川あれこれ（nagarask.blog109.fc2.com）」に疑問と危惧を載せました。

『なぜ「世界農業遺産長良川の鮎」の象徴でもある鵜飼い観覧船乗り場に放流する魚が、海外外来種のニジマスであって、もともと長良川に生息するアマゴではないのか？』

『釣り堀の開催期間中に大水が出たら、釣り堀から逃げ、結果的にニジマスを長良川本流に放流することになる』の2点です。

さらに、1週間後にもこの問題を取り上げ、岐阜市の「生物多様性プラン」には、「ペットや他地域で採っ

た動植物を野外に捨てない」と明記してあるではないか。岐阜県も「世界農業遺産長良川の鮎」のパンフレットの中で、豊かな生物多様性とその保全を謳っている。長良川に放流するアユだって遺伝子を守るためとして長良川で採取したアユから採卵し受精させ種苗を生産・放流していると宣伝している。それなのになぜ海外外来種のニジマスなのか、と批判しました。

そして2月1日のオープンの日。

オープン式典には、板垣国交省中部地整木曽川上流河川事務所長、古田岐阜県知事、柴橋岐阜市長、玉田漁協組合長が出席したそうです。私が午後、見学のため釣り堀に到着した時も、たくさんのアングラーが釣りを楽しんでいました。

それから3週間弱が過ぎた2月19日。

大雨によって長良川が増水、危惧していた通りのニジマス流出となりました。この件についての古田岐阜県知事の「長良川ブランドのイメージダウンが危惧される」という言葉、これはあまりにも無責任ではないでしょうか？

本川と仕切った土盛りが増水で崩れ去り、釣り堀のニジマスが流出。2/24 撮影

知事の「長良川ブランドのイメージ」とは何でしょうか？
今回たとえニジマスの流出がなかったとしても、ここで釣って帰った人は「長良川で釣ったニジマス（外来種）」というイメージを持ち帰るわけで、この釣り堀のオープンとともに生態系の保持を謳う長良川のブランドイメージなど壊れているわけです。

たとえ管理されていたとしても、ニジマス放流を問題と感じない鈍感さが理解できません。長良川ブランドを作りたい岐阜県や長良川漁協が、自らそれを壊す事業をすすめるとはどういうことでしょうか？

長良川を管理する国交省や岐阜県、岐阜市の自治体、長良川漁協、運営を任されていた釣り具メーカーのどこも釣り堀開設を発表する前に疑問を持たなかったのでしょうか？これらのうち1つでも、管理釣り場とはいえこの場所にニジマスはおかしいのでは、と疑問を持てば、これほど全国的に大きな問題とならずに済んだはずです。

しかもこの結果について、漁協の玉田組合長の「アユに影響はない」の言葉は、まるでアユにさえ影響がなければ経済的に問題がないので良いというような言葉で、生態系に対する配慮が感じられません。また岐阜県も「(ニジマスは）魚の捕食量は少なく、アユ漁や長良川の生態系に深刻な影響はない」で片付けようとしています。ですが、捕食量が少ないのが事実としても3,000匹のニジマスが放たれれば長良川の生態系に何がしかの影響があるのは間違いありません。そのことが全国的に注目された理由であるはずなのに、受け止め方に深刻さはありません。

アマゴもニジマスと同じくルアー釣りの対象魚ですが、選択しませんでした。長良川の生態系の中で生活し、銀毛アマゴやサツキマスとして伊勢湾と長良川を行き来きしている魚です。岐阜市付近の長良川にいても不思議ではありません。

県の水産業振興計画にあるように、始めから「管理釣り場にはニジマス」ということしか頭になかったのか、管理の容易さやコストなどを考えて経営面を優先させたのかのどちらかでしょう。もし世界農業遺産の長良川ということが少しでも念頭にあればニジマスではなくアマゴにしたはずです。実際に釣り堀オープン翌日の2月2日には、長良川漁協が岐阜市内の鏡島大橋付近、鵜飼いミュージアム前、千鳥橋付近の3ヶ所に100キロずつ計300キロのアマゴを放流していると漁協のホームページに載っています。

また昨年には長良川上流部で特定外来種のコクチバスが見つかり大きな問題となりました。流れや低水温に強く捕食量も多いのでアユ、アマゴなどへの食害が危惧され、生態系を脅かす存在として電気ショッカーボートまで導入し駆除に奔走しています。特定外来種と産業管理外来種という違いがあるとはいえ、管理できなかった釣り場に何の疑問も持たずニジマスを放流しています。これで本当に長良川の環境を守り続け、生物多様性を保持し、世界農業遺産の認定維持ができていけるのでしょうか？

一方、増水による流出の危険性についても、ただの釣り師である素人の私が、オープン前にそれを感じていたのです。

例年、冬場は降水量が少ない期間なので問題は起きないだろうと都合良く判断したのだと思いますが、かつて大水で鵜飼観覧船が流されたこともある場所なのです。

日頃、温暖化に伴う異常気象によって河川災害の危険性を訴え、長良川のあちらこちらで工事をしている国や県が今回のことについてまったく予想もしていなかったとしたら、そのことの方が大きな問題ではないでしょうか？

今回の大雨による増水を想定できなかった国や岐阜県は、大水や異常渇水を想定するとして、多額の税金を投入するコンクリートを使った遊水地を美濃市横越の長良川の中に計画し、木曽川水系導水路計画では渇水時の環境維持のためとして他の河川の、それもダムの貯め水を鵜飼い大橋上流で長良川に流そうとしています。これらの根っこにあるのは、長良川を生きている川として見ることなく経済的に利用することを優先させる姿勢です。この長良川をお金の面からしか見ていない姿勢が、今回のニジマス流出問題の根幹にあるのではないか、と私は考えています。

この問題については、よみがえれ長良川実行委員会が５月１４日、柴橋正直岐阜市長に宛てた「長良川の環境保全について」の要請の中で触れ、環境保全課、広域事業推進課、鵜飼観覧船事務所との懇談を持ちました。懇談する中で、釣り堀の場所については、岐阜市が鵜飼のために国土交通省から借りている場所で、鵜飼のオフシーズンに貸して欲しいと依頼され、断る理由がないので了解したとのこと、加えてニジマスを放流することについては、市長がオープニングセレモニーに出席したにも関わらず、市の環境保全課は事前に知らされていなかったことがわかりました。

水産事業ということで畜産課の担当になり、環境保全課まで話が伝わっていなかったとのことで、話を聞いて、市の中の横の繋がりがないことに驚きました。

今後については、長良川漁協がやらないと言っているので依頼はないと思うが、もし依頼があっても鵜飼観覧船乗り場を貸すことはない、と鵜飼観覧船事務所長は明言されました。この問題については、今後予定されている県の河川課への要請の場がありますので、そこで再確認していく必要があると思っています。

ニジマス（外来種：北米原産）－　「岐阜県の魚類」（第二版）より

全長 50 ㎝程度。成長すると体側にピンク色の縦条が入る。また、若魚は全身の小黒点が目立つ。明治時代以前から養殖・放流が行われている北米原産のサケ科魚類で、北海道では定着して在来生物に悪影響を与えることが危惧されている。原産国のカナダやアメリカ合衆国においても、さまざまな水系に移植放流された結果、在来種を駆逐したり、近縁な各地域固有種と交雑するなどの問題が生じている。

岐阜県でもさまざまな河川で放流がおこなわれており、飛騨地方の河川ではよく見られる。美濃地方でも釣り大会などのために河川への放流がおこなわれている。　－　産業管理外来種　－

「長良川のアユと河口堰」の出版

長良川市民学習会　武藤 仁

「長良川のアユと河口堰」が３月に出版された。これは愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会が発表した報告書や検討委員会が開催してきた県民講座などがベースになっているが、河口堰「開門」の立場に限らず、将来に向かって議論できるように、多彩な立場と分野で活躍する人々の執筆で成り立っている。

表紙のデザインから、帯にまで工夫され、誰でもどこからでも興味を持った所から入れるようになっている。とりわけカバー裏面の「源流遊行絵図」は壁に貼って残したいほど魅力がある。岐阜市出身の編集者・馬場さんのこよなく長良川を愛する気持ちが満ち溢れてる。ぜひ手に取って読んでいただきたい。

私は、第４章で韓国ナクトンガン河口堰について執筆させていただいた。これは私が約 10 年にわたって釜山市役所やＮＧＯと交流して得た成果を執筆したものだが、書籍として広く発表できたことに感無量。

私事で大変恐縮ですが、先日、高校生の孫がラインで「お爺ちゃんたちの本が、学校の図書館で紹介されとったよ～」と、写真添付で送ってきた。嬉しくて、孫に「贈呈」の返信。ただちに「ありがとー」のメールが返ってきた。この本で長良川や河口堰のこと、世代を超えてもっともっと考えてもらえたらと願った。

岐阜新聞
2024 年 5 月 5 日

岐　阜　　第３種郵便物認可

「長良川のアユと河口堰」出版

三重県桑名市の長良川河口堰が来年7月で運用開始から30年を迎えるのを前に、東京大学大学院農学生命科学研究科の蔵治光一郎教授(58)が編著を務めた新刊「長良川のアユと河口堰―川と人の関係を結びなおす」が出版された。鵜匠や漁師、研究者ら18人が、それぞれの立場から鮎や長良川と人とのつながりをつづり、人口減社会を踏まえ環境とも調和したこれからの河口堰のあり方を論じている。

（堀尚人）

◇

流域一体、対話の時代へ

「まさか長良川にこんなに長く関わることになるとは」。蔵治さんは、開門調査を公約に掲げて２０１１年に当選した大村秀章愛知県知事が翌年設けた「長良川河口堰最適運用検討委員会」の設立時からの委員。声がかかったのは、同県瀬戸市の演習林に勤務しながら矢作川流域の住民と一緒に「森の健康診断」に取り組んでいた頃だった。

今回の書籍は、国と対話のテーブルに着けないまま議論を重ねた検討委の10年間をまとめた22年の報告書がベースで、検討委員以外にも執筆を依頼して論考の幅を広げている。

馬場裕一さん

冒頭で「自分たちの川は、自分の手のひらと一緒」（小瀬鵜飼の岩佐昌秋鵜匠）など川をなりわいの場にする人たちの声を紹介し、「ばばちい（汚い）川になってまった」と話す羽島市のサツキマス漁師の故大橋亮一さんの講演録も掲載する。

次いで、河口堰による鮎の仔魚の降海への影響、海と川を行き来する鮎以外の「通し回遊魚」の激減、温暖化で1カ月遅くなった鮎の降海などの今の姿を研究者が報告。河口堰の開発水量のうち実際に使っている水が16％にとどまる利水の現状を踏まえ、「過剰な水資源開発、県民の過剰な負担」（小島敏郎元青山学院大教授）とも指摘する。

その上で、生態系再生や水質改善のため、塩水遡上を考慮しながら開門に取り組むオランダと韓国の河口堰の事例を紹介する。

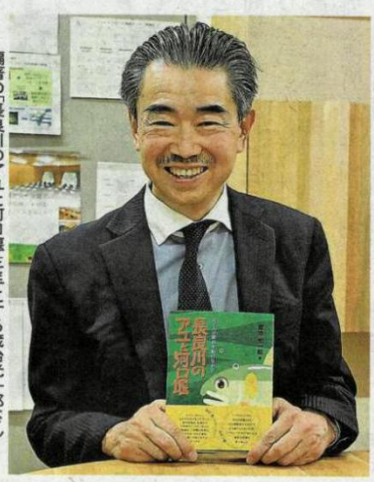
流域での一体的な水管理や治水対策を提言する蔵治さんは「対立から対話へ」の移行で、新しい未来図が描かれることに期待する。「人口が減り、生物多様性が失われてきた中で、過剰な利便性、渇水への過剰なリスク対応を求めるのではなく、『足るを知る』ことが必要」

書籍化を働き掛けた出版社「農文協」（埼玉県戸田市）の編集者、馬場裕一さん(46)＝岐阜市出身＝は「過去の対立を乗り越えられるような本にしたいと思った。しっかりとした議論の土台になるのではないか」と出版の意義を説いた。

表紙は岐阜県出身の絵本作家、村上康成さんが描き、帯にはロックバンド「サカナクション」の山口一郎さんと父で木彫家の山口保さんが一文を寄せる。Ａ５変型判、２３２ページ、２４２０円。

東大大学院の蔵治教授編著

人口減を踏まえ論考



編著の「長良川のアユと河口堰」を手にする蔵治光一郎さん＝東京都文京区、東京大学

「長良川のアユと河口堰」を読んで

― 私と長良川 ―

川那部　浩哉

これは、愛知県の長良川河口堰最適運用検討委員会委員を中心とする１８人の方々による本です。いや、この『ニュース』の読者の多くはすでに読んでおられるでしょうから、こう申したのは余計なことだったかもしれません。著者には、長良川はもとよりアユや川について、日本列島全体の中で優れた調査研究をしている方々が多く、「そのとおり」・「そのとおり」と頷きながら読みました。大橋亮一さんのものなど、１９７８年５月に羽島市小熊町のおうちでご父君の定夫さんのお話を聞き、サツキマスを漁って頂いたことも、まざまざと思い出しています。

また、関市白金で「登り落ち」を使い、雨の日も雪の日も毎朝・毎夕長年に亘って調査された後藤正さん・宮子さんご夫妻が今もご存命なら、この本の出版をどんなに喜ばれただろうかと、感慨を深めてもおります。

私が長良川を見た最初は５８年４月でした。岐阜大教授だった小泉清明さんに、日本生態学会のシンポジウム「河川生態学の諸問題」で話せと招かれたときで、忠節橋・長良橋（金華橋はまだなかった）の上や堤から眺めて、その美しさに驚嘆しました。あたりの川底には、一抱え以上の石もごろごろしていました。そして６３年には小泉さんから、「河口堰建設に伴い、＜木曾三川河口資源調査団（ＫＳＴ）＞を作るので、アユ班主任として参加せよ」との手紙が来ました。私はその２年前に始まった「琵琶湖生物資源調査団」の総務の一員だったので、双方はとても無理だとお断わりしたものです。しかしその後も報告書を送って頂いたりし、ときには意見を申し述べもしました。

長良川を見た次の機会は７４年で、４月には岐阜と名古屋へ、そして１１月には都留重人さん主催の「統計研究会（後の公害研究会）」の「環境国内診断・河川」の長良川調査に便乗して、河口から源流蛭ヶ野までと、支流をいくつか見ました。本流の上流はすでに開発が進み、汚濁も進んでいましたが、郡上八幡で合流する吉田川を見て、「本物の川」と感じたものです。だがその翌日ウナギで有名な粥川を見て、「本流よりはましにしても、吉田川も相当悪くなっているな」と感じなければならなかった筈であり、私の眼はすでに大きく曇っていたのだと反省したものでした。長良橋あたりの大石もこのときすでに姿を消していました。

その後長良川に関係したのは、７８年前半に河口堰に関するいわゆる「マンモス訴訟」の裁判で証言したことと、８９年１２月から９７年７月まで、日本自然保護協会の「河川問題特別委員会」と「長良川河口堰問題専門委員会」の委員をした程度です。中京大学の田中豊穂さんには、名古屋大学医学部におられた７４年ごろからずっとお教えを受け、いろいろお世話になっていたのですが、この両委員会をずっと主導し、専門委員会では座長にもなって下さいました。

第１次訴訟での私の証言は、「木曾三川河口資源調査団報告書」について、６４～６８年の５部６冊からなる膨大な報告書と、６８年の「結論報告」との整合性についてで、それは大きく異なっており、後者はとても要約ないし結論とは言えないことを、この訴訟を扱っておられた原告側弁護士の小出良熙さんに導いて頂きながら、申し述べたものです。この裁判は訴訟費用が多額になって、８１年に原告が取り下げざるを得ず、記録はほとんど公にされていないこと、これは良く知られていることでしょう。

自然保護協会の報告書は２度出され、結論として「長良川河口堰事業は一旦中止し、現在行われている工事の代替え案を検討し、代替え案を含む複数の方法に関する適切な環境影響評価を先行させることが必要であろう。その上で当該事業の是非を判断することが妥当である」としています。この間、建設省（現

国土交通省）河川局長と水資源開発公団総裁宛文書で資料を請求し、また何度も口頭で要請したのですが、「検討する」との返答のみで、いっさい提供されませんでした。

９４年２月に中部地方建設局河川部長の竹村公太郎さんと水資源公団長良川事務所長の宮本博司さんが来られ、「＜長良川河口堰モニタリング委員会＞を作るので」と参加を要請されました。「示してこなかった資料の一切を公開する」とのことで、喜ばしい変化だと考えましたが、私はちょうど他用で忙しかったので代わりに数人を推薦しました。田中豊穂さんは選ばれなかったのですが、名古屋大学水圏科学研究所を停年退官されていた西條八束さんのご努力・ご奮闘はたいへんなもので、多くの論文や著書も出ています。「とんでもない仕事を押しつけて」と恐縮する私に、「退官後の＜遊び道具＞を与えて貰った」と言って下さったのは、胸に強く残っています。

意見を出せとの要請が公団などから時々あったので、私は長良川河口堰の「開門調査」を提言しました。それ以前、堰のゲートを降ろす「試験的運用」を始めるとの話を聞き、「降ろす前に調べるべきことがたくさんあるから、それを充分に行なうまで待つべきだ」と、何度も強く進言していました。しかしこれは全く採用されず、「試験的運用」が始まり、それは何とそのまま「本格運用」に移ってしまったのです。そこで、「ゲートを降ろす＜試験的運用＞を行なうつもりだったのなら、ゲートを挙げる＜試験的運用＞もできる筈、いや、行なうべきだ」、というわけです。しかしこれもまた残念ながら採用されるところとはならず、そのまま現在に至っているのです。

河川法が９７年に改正され、＜治水＞・＜利水＞に加えて＜河川環境の整備と保全＞が目的化され、また、「公聴会の開催等関係住民の意見を反映するために必要な措置を講じなければならない」との項目の入ったことは、もちろんご承知でしょう。長良川河口堰反対運動がこれに大きく効いたこと、事業関係者の中には長良川でのさまざまな失敗を認識し、全く違った方向に向かって仕事を進め始められた人があることも聞き知っています。河口堰をめぐる長良川でのさまざまな運動が、あの重い腰を動かしたのです。

長良川河口堰が治水にも利水にも意味のないことは、この本にもあるとおり明らかです。先ず堰の開放をしなければならないことは、国土交通省などがこれまでやってきた事実の経過や約束から見ても明白です。省内でもそれ以外にやりようのないのは、実は判っていることでしょう。それに向かって、皆んなで引き続き努力をして行こうではありませんか。

それと同時に要求し実施しなければならないのは、この本にもあるとおり、当面次のようなことでしょう。一つは治水などにおいてある基準値を設け、それ以下については対処するが、超えた場合はいっさい諦めて、住民の生命や生活などはどうなっても構わないという、とんでもない考えを取り止めること、この本の用語を借りれば、＜定量治水＞から＜非定量治水＞へと考えを変えることです。もう一つは、少し長い時間で見れば結果の悪くなることの判りきっている「生きものの放流」なるものも、早く止めることです。

われわれは、人間が自然を変えることを＜是＞とし、とくに５０年頃からは、人間は自然を自然以上に上手に速く変えることができると思って来ました。「多自然型河川づくり」は、その典型例の一つです。しかしそれが誤りであったことは、今や明らかになっています。「自然を作り上げられるのは自然だけ」、それも長い時間をかけてのものであり、人は自然のこの働きを妨害することなく、「おずおずとそれをお手伝いすることができるだけ」だということは、もはや明らかなのです。

『長良川のアユと河口堰』は、時宜を得た（ほんとうはやや遅い）見事なものです。最初にも申しましたとおり、この『ニュース』の読者には、すでに手に取ってお読みになっている方々が多いかと思います。まだお読みでない方はぜひ手に取って、またすでにお読みの方は何度も熟読して下さることをお願いして、筆を置きます。

（２０２４年５月１０日記）

（かわなべ　ひろや）
京都大学名誉教授、滋賀県立琵琶湖博物館初代館長、元日本自然保護協会・河川問題調査特別委員会委員長

偲ぶ

高橋 恒美さん

フリージャナリスト・元新聞記者の高橋恒美さんが５月に亡くなられました。83 才。

高橋さんは長良川河口堰建設反対運動の第１期の運動ともいえる岐阜市を中心とした流域住民による「長良川河口ぜきに反対する市民の会」（1974 年１月に発足）の機関紙『川吠え』（160 号まで発行）の初代編集長を務められました。

私たち長良川の市民運動の新参者は、「市民の会」のたたかいの業績を繰り返し学びながら運動を進めてきました。

長良川市民学習会は高橋さんを講師に2009年6月のトーク＆コンサート「このままでこのままで長良川」、2017 年３月の学習会よみがえれ長良川Ⅱに登壇いただくとともに、当会ニュースでは「長良川と鮎鮨街道」（2017 年 24 号）、「建造の堰、あらためてご覧あれ」（2020 年 32 号）の原稿をいただいています（当会ホームページの「バックナンバー」で振り返ることができます）。

高橋さんの著作「鮎鮨街道いま昔」（岐阜新聞社 2008 年）は、岐阜・長良川を学ぶ上で必須の書物です。地元笠松地域での「鮎鮨街道イベント」は、いのちが尽きるまで続けられた活動でした。

2012 年の安倍政権以来、日本の政治社会は腐敗し急速に戦争への道を進んでいます。私は、仲間として高橋さんとこれに抗う行動を「もう黙っとれん実行委員会」続く「岐阜総がかり行動実行委員会」を立ち上げ進めました。高齢ながら高橋さんは休むことなく街頭に立ち、実行委員会では先頭に立ってたたかってみえました。

高橋さんが最後に私たちに遺した言葉は、沖縄発の「勝利するコツは、あきらめないこと」です。

私たちは、この言葉をかみしめ前に進みたいと思います。

高橋さん、本当に長い間ご苦労様でした。ありがとうございました。安らかにお眠りください。

（武藤 仁）

嶋津 暉之さん

水問題研究家の嶋津暉之さんが２月に亡くなられました。80 才。

東京都の環境科学研究所を退職された後、全国各地でダム問題に取り組む仲間を結ぶネットワークである「水源連」（水資源開発問題全国連絡会）を設立。全国各地の水源開発、ダム建設反対運動などの市民運動を国の資料の分析など理論的な面から支え、情報を発信し、ダムをめぐる多くの訴訟や集会にも手弁当で携わってこられました。

この地区でも、長良川河口堰の市民による差し止め訴訟や徳山ダム裁判、設楽ダム問題でも大変お世話になりました。

本当にありがとうございました。心からお悔やみを申しあげます。

嶋津さんへのインタビューが、2013 年６月に放送された https://www.videonews.com で視聴できます。

事務局より

◆いつも卑近な話ですみませんが、有言実行に繋げたいと思い書きます。
　週２回のゴミ出しにアパートの５階から非常階段を昇り降りする話の続きです。
６５段は去年と比べると、やっぱり辛くなっていますが、覚悟していたので、遅いながらもリズムは整っているように思います。今年もまた３月に 10 日間程入院しました。またキツくなるなあと心にかかりました。退院後の１回目はゆっくりゆっくり登り降りです。
　どんなことも経験すると心構えができて、以前と比べながらできます。それで辛さも軽くなり、気分も前向きになります。こんなことがよく分かりました。
来年の今頃またご報告します。こうやって皆さんに明らかにすることで、頑張らなくちゃ！と自分を励ましてやります。　（岡 久米子）

◆私たちは 2010 年に名古屋で開催された「生物多様性会議」COP10 の市民交流会場で、韓国の 4 大河川事業による環境破壊の深刻な状況を知り、日韓交流を始めました。交流を進める中で、洛東江（ﾅｸﾄﾝｶﾞﾝ）河口堰開放運動を知り、釜山（プサン）市役所や市民団体と情報交換を重ね河口堰開門をめざす活動交流を深めました。
　韓国の南部を流れる洛東江の広大な河口部は世界有数の渡り鳥の中継地で、生物多様性と生産性に富む場所でした。そこに、1987 年に長良川と同じような河口堰が建設され、水質悪化や魚介類の減少など様々な問題が起こりました。韓国では粘り強い運動の結果、政権が堰開門を公約することになり、官・民が協力しての堰の開門調査、実証実験が進んできています。
　今回「愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会」の県民講座で、農業、漁業関係者をはじめとする市民団体をまとめてこられたチェさん、釜山市職員のパクさん、環境省から開放業務を委任された韓国水公社（K-Water）のイさんの３名の方が豊富な資料を元に今までの経過、現在の状況を報告されました。
　私が何よりも感銘を受けたのは、市民団体と釜山市、国の機関である水公社の３者が、環境改善を目指し、多くの困難を克服し、綿密に調査や実証実験を協力してやってこられたことです。着実に水質改善も進み、ウナギやサケなどの回遊魚やしじみなども戻り、汽水生態系が少しづつ改善されているようです。
　チェさんは最後に「私たちは多くのことを長良川から学ばせてもらってきたが、今回は教える側として招待され驚いている」と語り会場を沸かせました。調査や実証実験を取りまとめてきた水公社のイさん（女性）は「今後も愛情を持って民・官・学で協力して、さらに汽水生態復元を目指していきたい」と静かに決意を述べられました。
　長良川でも韓国に学び、開門への動きが進むようがんばりましょう。　（田中 万寿）

◆我が国は民主主義国家ですか？選挙の投票率はほとんど 50%を切ります。国会議員の三割は世襲です。
　国の借金は世界一。政府は涼しい顔で、来年はなんと 1300 兆円を超えます。
　戦後７８年。意識、制度、組織は老朽化し、錆びつき前に進みません。
　国交省は組織維持のため予算を確保し、無駄な事業を強行します。
　無駄の極み、徳山ダムの水を新たに導水路を造り、長良川と木曽川に流す計画を強行します。工事は有害でなんの役にもたちません。
　政治は国民の生活を善くするためにあり、国や新自由主義を守るものではありません。　（粕谷 豊樹）

◆木曽川水系連絡導水路（徳山ダム導水路）事業が 2009 年に「凍結」となってからほぼ 15 年。寝たフリをしながら事業費は２．５倍にまで育って、むくむくと起き上がってきたようだ。
　水需要は減少する一方なのだから、要らない導水施設建設にお金を注げば必ず水道料金値上げに結びつく。「異常渇水時でも節水など考えずにジャブジャブ水を使うこと」など誰が望んでいる？ダムの水を長いトンネルを通って他の河川に持ってくることが「河川環境保全に資する」はずがない。「木曽川のヤマトシジミの生息のため」にダムの水が要るなどという世迷い言、底生生物の専門家の関口さんは木曽川水系流域委員会で怒っていた。「長良川のアユ・ウグイ・カワヨシノボリの産卵のために水深 30cm を確保」なんて科学的根拠は全く存在しない。
　河川環境を攪乱し、地下水脈に悪影響を与える「おそれ」は濃厚になるばかりだ。
　徳山ダム導水路は要らない、「中止」一択あるのみ。　（近藤ゆり子）

◆「ニジマス流出問題について」のところで一言だけ触れましたが、岐阜県が策定した『岐阜県水産業振興計画―　岐阜県の天然鮎・漁協の現状と施策（対策期間：令和５年度～令和９年度）』というものがあります。349441.pdf（gifu.lg.jp）

これは長良川だけでなく岐阜県の水産業全体の問題を対象に策定されたもので９４ページあり、目次には現状と課題について以下のように書かれた部分があります。

・「今後 10 年で、鮎の漁獲は 3 分の 1 へ激減し、水産物としては市場価値を失う」
・『世界農業遺産（ＧＩＡＨＳ）「清流長良川の鮎」の認定維持への懸念』などです。

岐阜県民としてビックリするようなことで、「これは大変だ！全部読んでみなければ」と思わず９４ページすべてを印刷してしまいました。

読むと、本文の現状と課題には、長良川を中心とした岐阜県の河川の恐ろしいような状況が書かれています。そして多くの課題に対してさまざまな施策（案）があがっています。

漁協の収入増加、活力ある（釣れる）漁場づくり、担い手の確保、観光振興施策展開、養殖業への支援などです。その一環として、「トラウトのゾーニング管理」（トラウトとはサケ科の魚）の項目で、ニジマス釣り堀が、漁協の収入増加施策の中に入っていました。大失態だった鵜飼観覧船乗り場の釣り堀もこれに倣ったのでしょう。

県はこれほどの危機感を抱いているにもかかわらず、この振興計画で河口堰そのものの問題点についての言及はありません。岐阜県の水産業や観光資源の大部分を占める長良川について課題があるとしたら、川の首根っこを締めるように存在する河口堰を、どうしていけば良いのか取上げるのが普通だと思います。それでも取上げないということは、河口堰を語るのをタブーとして意識的にさけているのだと思います。しかし、逆に言えば、その避けて通らなければならないこと自体が、河口堰が長良川を苦しめる原因である事を皆が知っているという事実を、この振興計画は表現しています。

そして、この危機感の中で、県はさらに導水路で他の川のダムの貯め水を長良川に流せと要求しているのです。

長良川はどうなってしまうのでしょう？

皆さんもこの水産業振興計画ぜひ読んでみて下さい。サスペンス小説より考えさせられ、引き込まれてしまうかもしれませんよ。　（堀　敏弘）

◆導水路「検討の場」第８回幹事会を傍聴した。事業費 2.5 倍の発表に、どの自治体も反論はおろか反応も示さない。異様な会議だった。それとアレっ？と思ったことがあった。提出された資料には従来の縦断図にあった山岳工法（ナトム工法）区間が根尾川右岸から木曽川まで消え、すべて圧力管に変えられている。

私は現職時代上水道の土木職だったので、トンネル工事といえばせいぜい直径１ｍのセミシールドぐらいしかやってないトンネル素人だが、それでもナトム工法からシールド工法に変えれば大幅に工事費増額は予想できる。工法変更によりいったいどれほどの増額になるのか？本ニュース読者でトンネル工事に詳しい方がみえましたら是非、教えてほしい。

幹事会では、この工法変更には一言も触れず、事業費増額の理由に「物価上昇」「働き方改革」を挙げただけだった。おかしい。「金のかかる工法に変えたのは何故？工事による地下水位の低下を恐れたのだろう！ 」と再三、導水路建設事務所に問うたが、まともな回答がなかった。

埒が明かないので衆議院の本村伸子事務所から国交省に対し「資料提出」を求めた。「回答」はこうだった。ナトム工法では施工前と比べて水位が低下した状態となる可能性があるが、シールド型ＴＢＭ工法なら、地下水の水位への影響は限定的かつ一時的なものになる旨の予測となったとして、シールド型ＴＢＭ工法を検討したと述べている。やっぱり、地下水だ。

そんな中、瑞浪市においてリニア工事により地下水位が低下。「農業用水・井戸に深刻な被害が発生」のニュースに人々は驚いた。私は戦前の丹那トンネル工事を題材にした小説「闇を裂く道」を思い起こした。トンネル工事の影響で田畑の水を失った農民たちの悲惨なたたかいと運命。読むのが辛かった。。

５月 17 日の第２回検討の場では、岐阜県、瑞浪市、各務原市から導水路工事による地下水影響の不安が表明された。事業者は、「影響は軽微」で通そうとするが、見えない地下水への不安は収まらないだろう。事業者は不安を押さえようとさらに、対策工事費を膨らます。キリがない。

不安が仕事をつくる？ もうこんな、悪夢のサイクルは止めてほしい。要らない導水路事業は今すぐきっぱりやめて、要らぬ「不安の種」は撒かないことだ。　（武藤 仁）

当面の日程

・６月５日（水）18：00～20：00 **導水路検討報告書（素案）の「ご意見をお聞きする場」＊要事前申し込み**
岐阜会場（ハートフルＧ）、名古屋会場（ウイルあいち）、桑名会場（パブリックセンター）
・６月 10 日（月）11：00～12：00 **岐阜県要請行動**　県庁３階 301 号（集合：10:45　１階ロビー）
・６月 16 日（日）**さよなら原発ぎふパレード** 10:30 清水緑地公園（ＪＲ岐阜駅南）集会後、市中パレード
・６月 29 日（土）～7 月１日（月）**パネル展「よみがえれ長良川 2024」**ぎふメディアコスモス

本紙では、よみがえれ長良川実行委員会の仲間の紹介をしています。
第 17 回は、「中部の環境を考える会」です。

参加団体紹介 17

中部の環境を考える会

事務局長　藤川誠二（弁護士）

中部の環境を考える会（「中環」と呼んでいます。）は、環境問題に関心のある中部地区の学者や弁護士、新聞記者らが中心となり 1982 年に結成されました。会員には多くの一般市民も参加しています。会の目的は、かけがえのない地球を守るという視点に立って、中部の自然・社会・歴史・文化など人間の生活をめぐる、さまざまな環境問題をそれぞれの立場で考え、研究し、交流する場とする、というものです。特定の環境問題に取り組むのではなく、広く環境問題を取り上げ、会員や一般市民に良質な情報や正しい知識を提供するような活動をしています。中環の組織は、一般会員のほか、会の運営を担当する世話人とその中から事務局を数名選任し、例会などを企画運営しています。

設立の中心として関わったのは、森嶌昭夫先生（法学者、名古屋大学名誉教授）や野呂汎弁護士（四日市公害訴訟の原告弁護団事務局長）のほか、当時、東海地区で発生した公害事件に関わったさまざまな分野の学者や研究者の方々で、環境問題に取り組む市民活動を地域に根付かせることも目的にしていました。

活動内容は、学習会やシンポジウムの開催、現地視察、他団体との交流や情報交換などで、新型コロナウイルス感染症の拡大前までは、ほぼ毎月例会等を開催していました。新型コロナによる影響は、中環の活動にも大きな影響を及ぼしました。特に中環は、高齢会員が多いこともあり、例会の開催ができず活動休止を余儀なくされました。また、毎年欠かさず発行していた会報誌「環境と創造」の発行もこの時期に発行ができなくなりました。新型コロナの直前には、長年、中環の事務局長をされてきた野呂汎先生がお亡くなりになり、また、会員の高齢化による例会参加者の減少、そして新型コロナの問題が重なり、会の存続を真剣に検討した時期もありました。

しかし、公害・環境問題は、なくなるどころかより複雑広域化し、私たちの生活に密接にかかわり続けています。現在は、事務局体制を新たにし、2024 年 1 月には例会を再開し、新たな中環として、会の歴史を引き継ぎつつ、今の時代に合った活動に少しずつ変化していきたいと考えています。

中環では、例会の年間数回の例会の開催を目指し、内容をより充実させ、ひとりでも多くの市民・会員の方に、参加していただきたいと考えています。そして、皆さんのそれぞれの立場で環境問題を考えていただき、よりよい生活環境の実現につながればと思っています。

ぜひ、中環の例会にご参加ください。会員も募集中です。　QR コードは中環の HP です。

パネル展「よみがえれ長良川 2024」開催のお知らせ

よみがえれ長良川実行委員会が主催します。お誘いあわせのうえご参加ください。

● 会場　ぎふメディアコスモス ギャラリー

ギャラリー前では、子どもたちが泳ぐ魚を見、カニと遊べるエリアを作ります。

● 期間　６月２９日（土）～７月１日（月）

6/29～6/30 は、10：00～19：00、7/1 は 10：00～15：00（受付スタッフなど、ご協力をお願いします）

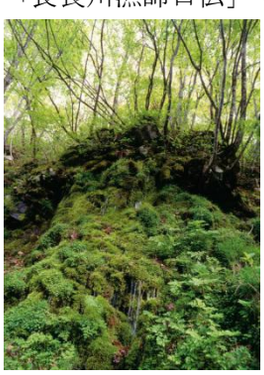
・設営作業は、６月２８日（金）9：00～20：00、撤収作業は７月１日（月）15:00～21:00 に行います。
・作業スタッフとして多くの皆様のご協力をお願いいたします。

-パネル展-

・長良川河口堰開門・事業費 2.5 倍の導水路問題・ニジマス釣り堀問題・横越「遊水地」問題などを展示

磯貝政司さんの写真展

「長良川漁師口伝」や「長良川のアユと河口堰」に登場した写真を、一挙２２作品展示します。



「いのちをつなぐ海のものがたり矢田勝美」コーナー
“魚供養の絵”展示

発行：長良川市民学習会
http://dousui.org/
代　表：粕谷志郎
連絡先：武藤　仁／090-1284-1298
〒500-8211　岐阜市日野東 7-11-1

● 私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。
賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840－3－158403
口座名称：長良川市民学習会

本ニュースのバックナンバーは　http://dousui.org/news/index.html　でご覧になれます。